AI エージェントが大学生の研究と就活に果たす貢献と課題

植田康孝（Yasutaka Ueda）

Keywords：AI エージェント、マルチモーダル AI、フィジカル AI、イマーシブ空間、知能爆発

１　目的

本研究の目的は、**AI エージェント**に実装された推論モデル「o3」の IQ が 157 に到達し人間は知能で勝てなくなった 2025 年時点での学生に及ぼす効用と課題を検証することにある（大卒 112、東大卒 120、修士 133、博士 145、イーロンマスク 155、アインシュタイン 160）。学生がアクセスすることが難しかった英 BBC や米 CNN、NY タイムズだけでなく、中国語、韓国語、ロシア語、アラビア語、YouTube の学会発表や長尺インタビューにアクセスし日本語でまとめてくれる。植田が試した KPOP テーマでは 264 の多様な情報源を示した。競技プログラミングで世界 50 位になり日本人プログラマーは勝てなくなった。テーマ設定し学術論文を書いてくれと頼めば 30 分で書いてくれる。アイデア創出から実験の計画・実行、結果の要約、論文の執筆、査読まで研究サイクルを自動化する。「**知識**」と「**推論**」では人間は勝てなくなった。残されたのは「**実験**」である。

２　方法

本研究の調査・分析方法は、AI 時代の文系学生に対する教育は、理系のような「実験」重視か、あるいは「**EQ**」重視か、実教育を通じて検証した。オープン AI は「ChatGPT」の一番の不満点だった人格や感情的なサポートを向上するため、2025 年 2 月、「**GPT-4.5**」をリリースした。生身の人間が対話する相手としての性能を高め、「**EQ**」という言葉を使った。「感情知能指数」や「心の知能指数」と訳される。**自動改札**に IQ（運賃や駅名に関する知識や運賃の適正判断）で負けた駅員が**ホスピタリティ**（乗客の案内・誘導・介助、多言語対応）に生き残りを見出したに等しい。AI 研究者は「広告広報の大半の仕事は AI に代替できるが、謝罪は人間に残る。AI ロボットに土下座されても人間は納得しない」とする。謝罪は「EQ」が高い業務と言える。

３　結果

調査・分析の結果、新たな視座を与えてくれるなど、**グループディスカッション**では効用が見られた。「積極的に発言するように」と指導されても、学生が同級生を前に話をするのは勇気が要る。恥ずかしいと感じる以外に、東日本大震災以来、「絆」や「ワンチーム」という言葉で**同調主義**が強化された日本では、異なる意見や価値観を持つ場合、発言を控える傾向が高まる。AI エージェントは嫌なこともアドバイスしてくれる。**データサイエンス**による無機質に「ｎ＝マス」をターゲットする手法とは違い AI エージェントは「**ｎ＝１**」に寄り添う手法を可能にする。

４　結論

以上により、**アート**では、「人間が書いたから良い」「人間がやるべきものだ」という「**バカの壁**」を強調する人が多いが、**科学**では、「正しいか正しくないか」「社会に役に立つか」が重要であり、研究者視点では AI か人間かは関係ないという意見も出る。大学における AI エージェントの効用と課題を共有し、研究者視点と教育者視点から皆様のアドバイスを頂きたいと考えております。